



男子バスケット 61年ぶりV

昨年の11月30日、第66回全日本大学バスケットボール選手権の決勝が行われた。25年ぶりに決勝に進出した筑波大は3連覇を狙う東海大と対戦した。

第1ピリオド開始直後は両者無得点とディフェンスが光った。しびれる展開が続いた。均衡を破ったのは筑波だった。開始2分過ぎ、ディフェンスリバウンドからの速攻で馬場雄大選手(体育1年・富山第一高)が先制した。その後も主将の笹山貴哉選手(体育4年・京都・洛南高)などの得点で8・0とし、6分弱の間東海に得点を与えない素晴らしい守りを見せた。前半は馬場選手と杉浦佑成選手(体育1年・福岡・大付大濠高)のルーキーコンビの活躍で筑波ペースのまま試合が進み、30・19と筑波リードで終えた。

後半に入ると一転して王者・東海が反撃を見せる。開始4分同点に追い付き、その間筑波は全く点を奪えないという展開に。しかし、ここで筑波は逆転を許さずに踏みとどまり、42・39で第3ピリオドを切り抜けた。第4ピリオドは筑波がスロープレーを連発して勢いに乗る。東海も3Pシュートなどで応戦するが笹山選手や杉浦選手がゴールで差を詰めさせない。残り1分というところで坂東拓選手(体育4年・福井・北陸高)がシュートを決めて9点差とし、試合をほぼ決定づけた。東海もわずかなチャンスに賭けてフールゲームにするも、筑波はフリースローを確実に決めた。最後は67・57と差を広げて筑波が61年ぶり2度目の優勝を果たした。決勝で最多得点を獲った笹山選手には最優秀選手賞(MVP)が、坂東選手と杉浦選手には優秀選手賞が贈られた。



剣道・竹ノ内

43年ぶり学生王者

約3ヶ月前の11月3日、日本武道館で開催された第62回全日本剣道選手権。観客の視線を最後まで釘付けにしたのは、穏やかな笑顔が印象的な若き大学3年生だった。筑波大学剣道部主将、竹ノ内佑也選手(体育3年・福岡・大濠大付高)が、初出場にして並み居る強者を凌いで、43年ぶりの学生王者に輝いた。更に21歳での優勝は史上最年少と、記録づくめの大会となった今回の全日本選手権出場選手の中で、大学生はわずか3人。その中で鮮烈な印象を残した竹ノ内選手にお話を伺った。

まずは優勝の感想。「嬉しい」と一言、満足げな笑顔で振り返ってくれた。決勝戦、2本目の面が決まった瞬間も優勝の実感はなく、終わって「ただけ思ったという。勝ち進んでいく中で優勝を意識したとはなく、ただ勝ちたいという一心で試合に臨んでいたぞうだ。決勝戦まで来てもらえたのは優勝できたと思う。かを伺ったところ、一番は運が良かったからですね」と笑いがこぼれ出てきた。確かに前回大会の覇者が大会序盤で負けたりなどの波乱はあったが、運だけで日本を制覇できるはずもなく、竹ノ内選手の実力も間違いなく証明されているはずだ。

この大会の約2週間後に、それは変わらなかった。準決勝で警察選手権優勝の実績をもつ中選手を破ると、その勢いそのまま、決勝は得意技の面2本で対戦相手に決めた。全日本選手権の参加者は、大多数が警察官が占めており、応援などで会場が盛り上がる学生の大会とは雰囲気は全く異なる。試合中の会場は静寂に包まれ、一本が決まっても拍手が沸き起こるだけの厳かな雰囲気だ。そんな中でも、竹ノ内選手は平常心を失わず、いつも通り自分の力を出すだけ、と落ち着いていた。

どうして優勝できたのかを伺ったところ、今度は運が良かったからですね、と笑いがこぼれ出てきた。確かに前回大会の覇者が大会序盤で負けたりなどの波乱はあったが、運だけで日本を制覇できるはずもなく、竹ノ内選手の実力も間違いなく証明されているはずだ。

今後の抱負を伺った。「5月に東京で世界大会があるので、そこに照準を合わせ、日本のために活躍したい」と話してくれた。将来は警察官を目指しているという竹ノ内選手。筑波大の主将、そして日本剣道界の新たなエースとしての更なる活躍に、これから期待したい。

(鈴木優輔)



筑波スポーツ

平成27年2月10日(火) 第160号

題字: 中山雅史氏 (元サッカー日本代表・蹴球部OB)

平成26年度筑波大学体育会賞

～団体の部～



全日本大学バスケットボール選手権大会
優勝!!

**男子
バスケットボール部**



第65回
全日本学生バドミントン選手権大会
女子団体優勝!!

バドミントン部



天皇賜盃第83回
日本学生陸上競技対校
選手権大会 女子総合優勝!!

陸上競技部



第56回日本医科学学生総合体育大会
優勝!!

**医学
アイスホッケー部**

～個人の部～



永瀬 貴規
柔道グランドスラム東京
2013
優勝!!



藤原 恵美
2014年
ポーランドジュニア国際大会
2位!!



末木 貴将
2014年
ロシアジュニア国際大会
優勝!!



内尾 真子
2014年
世界ジュニア柔道選手権大会
3位!!

柔道部



竹ノ内 佑也
第62回
全日本剣道選手権大会
優勝!!

剣道部



星野 力維
DTBカップ 団体優勝!!

体操競技部



諸貫 瑛美
国民体育大会 50m背泳ぎ
日本短水路選手権大会 50m背泳ぎ
ワールドカップ日本大会 50m背泳ぎ
優勝!!



金子 雅紀
日本短水路選手権大会 100m背泳ぎ
200m背泳ぎ 日本新記録
ワールドカップシンガポール大会 200m背泳ぎ
優勝!!
ワールドカップ北京大会 200m背泳ぎ 3位!!



小林 明日香
日本短水路選手権大会 50m平泳ぎ
ワールドカップ日本大会 50m平泳ぎ
優勝!!

水泳部



小出 奈実
第10回
全日本学生ラート競技選手権大会
団体1位



星野 崇
第10回
全日本学生ラート競技選手権大会
団体1位



北島 瑛二
第10回
全日本学生ラート競技選手権大会
男子直転部門 1位



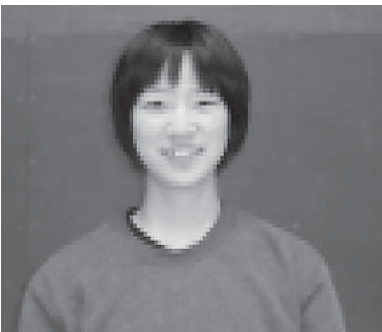
堀口 文
第19回全日本ラート競技選手権大会
女子直転部門・女子跳躍部門 1位
7th World Team Cup 1位

体操部



朝日 優衣

2014
東アジア地区女子選手権大会
優勝!!



土井 さくら

2014
東アジア地区女子選手権大会
優勝!!



松浦 佑希

第19回全日本ラート競技選手権大会 女子個人総合
7th World Team Cup
第10回全日本学生ラート競技選手権大会
団体・女子個人総合・女子直転部門・女子跳躍部門・女子斜転部門
1位



相原 奨之

第10回全日本学生ラート競技選手権大会
団体・男子個人総合
女子斜転部門・男子跳躍部門
1位



勝山 眸美

(写真中央)
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
ハンマー投 優勝!!



伊藤 明子

第16回アジアジュニア陸上競技
選手権大会 400mH
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会 4x400mR
優勝!!



平野 綾子

2014日本学生陸上競技個人
選手権大会 800m
第16回アジアジュニア陸上競技
選手権大会 800m
優勝!!



大室 秀樹

2014
日本学生陸上競技個人選手権大会
110mH 優勝!!



津田 修也

天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
3000mSC 優勝!!

陸上競技部



保坂 雄志郎

(写真中央)
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
ハンマー投 優勝!!



嶺村 鴻太

第98回
日本陸上競技選手権大会 走幅跳
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会 走幅跳
優勝!!



榎本 優子

天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
棒高跳 優勝!!



久世 生宝

天皇賜盃第83回
日本学生陸上競技対校選手権大会
やり投げ 優勝!!



松原 恵

天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
七種競技・4x400mR
優勝!!



衛藤 昂

第98回日本陸上競技選手権大会 走高跳
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会 走高跳
優勝!!



長澤 圭吾

第57回
東日本医科学生総合体育大会
男子800m 優勝!!



小原 隼人

第57回
東日本医科学生総合体育大会
男子三段跳 優勝!!



浅田 陸

第57回
東日本医科学生総合体育大会
男子5000m・男子3000SC
優勝!!



川口 安珠

第57回
東日本医科学生総合体育大会
女子円盤投 優勝!!



藤岡 伝

第57回
東日本医科学生総合体育大会
男子400mH 優勝!!



神保 祐希

天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
4x400mR 優勝!!



松田 絵梨

2014日本学生陸上競技個人
選手権大会 400mH
天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会 4x400mR
優勝!!



中野 瞳

天皇賜盃第83回日本学生
陸上競技対校選手権大会
走幅跳 優勝!!

医学陸上競技部

体育会執行委員長より



はじめまして。体育会第39代執行委員会委員長の若木です。私は執行委員2年目となりますが、体育会の皆さんの活動が少しでも活発になるよう、今年も全力でサポートしていきたいと思います。

大学に入学してまで生活の大半を占める体育系の課外活動を行う意義とは何なのか、私には、多くのことを話し、学び、理解し合える、そういう「仲間」を見つけることだと考えています。本気で課外活動に励むことで互いの意見をぶつけ合う。そうすることで高い水準のパフォーマンスが試みの中で発揮されるのだと考えます。ライバルであり、信頼できる仲間をつくることのできるのは本気で何かを行なったときだけです。筑波大学の体育会所属団体の大会等における成績は素晴らしいのですが、その成績を取られる背景にはこのように信頼できる仲間が恵まれているということも関係しているのではないのでしょうか。今年も素晴らしい成績を取られることを期待して止みません。

体育会会賞受賞者特選インタビュー

柔道

永瀬選手

2014年、筑波大学で最も活躍した選手と言ってもらいたくないだろうか。柔道部永瀬貴規選手(体育3年、長崎・長崎日本大学学園。自身初の世界選手権では団体優勝に大きく貢献、12月のグラントスラム東京では実力を見せつけ2連覇と、嬉しいニュースをたくさん届けてくれた。

永瀬選手は「初戦から強豪とあたる、組み合わせ的には結構厳しい戦いだっただけで優勝できたので良かった」と振り返った。前回王者として臨んだわけだが、「世界選手権で負けた身なので自分にはプレッシャーという意識があった。しかし『昨年は初出場、誰からも研究されることもない中でできた優勝だった。今回はある程度まわりの研究もされて、そういう中で勝つのは昨年とは違う点』と、確実に成長

を感じている様子だった。8月の世界選手権での敗北からグラントスラム東京までは、世界選手権での敗因、欠点を克服することに集中した。具体的には、「組み手がワンパターン化していた」ことに對する改善に取り組んだ。そして「いろんな組み手で相手を錯乱しつつ、自分の得意な組み手に持っていくように」意識して練習したという。その練習の成果を発揮できたからその優勝だろう。

組み次第、そういう意識で練習に取り組んできたという。

2015年は大学生としての最後の年だ。「大学三年間で学んだことを活かして、最高の年で大学生活を締めくくられるようにしたい。そして次の年のリオデジャネイロ五輪に繋がるような年にしたい」と話してくれた。

柔道は小学一年生の時に始めた。小学生の時は県大会優勝が目標。高校に入ってから本格的に日本を目指したという。憧れの筑波大に入ると、今は世界を目指している。直近の目標は、2月20日からドイツであるグランプリ・デラセドルフでの優勝。「アウェイの大会でもしっかりと勝つ」ことが課題だ。その先には世界選手権、五輪が待っている。大舞台で番になる姿を楽しみに待ちたい。

(藤原真梨子)



水泳

金子選手

今年も筑波大学の多くの選手が活躍し輝かしい成績を取った。今回体育会賞を受賞された金子雅紀選手(院1・埼玉・細田学園高)もその人である。

金子選手は昨年、北京・東京・シンガポールで行われたFINA/MASTBANKワールドカップアジアシリーズに出場した。この大会において金子選手は出場した全種目で決勝に進出し、北京大会では200m背泳ぎで銅メダル、最終戦のシンガポール大会では同種目で見事金メダルを獲得した。

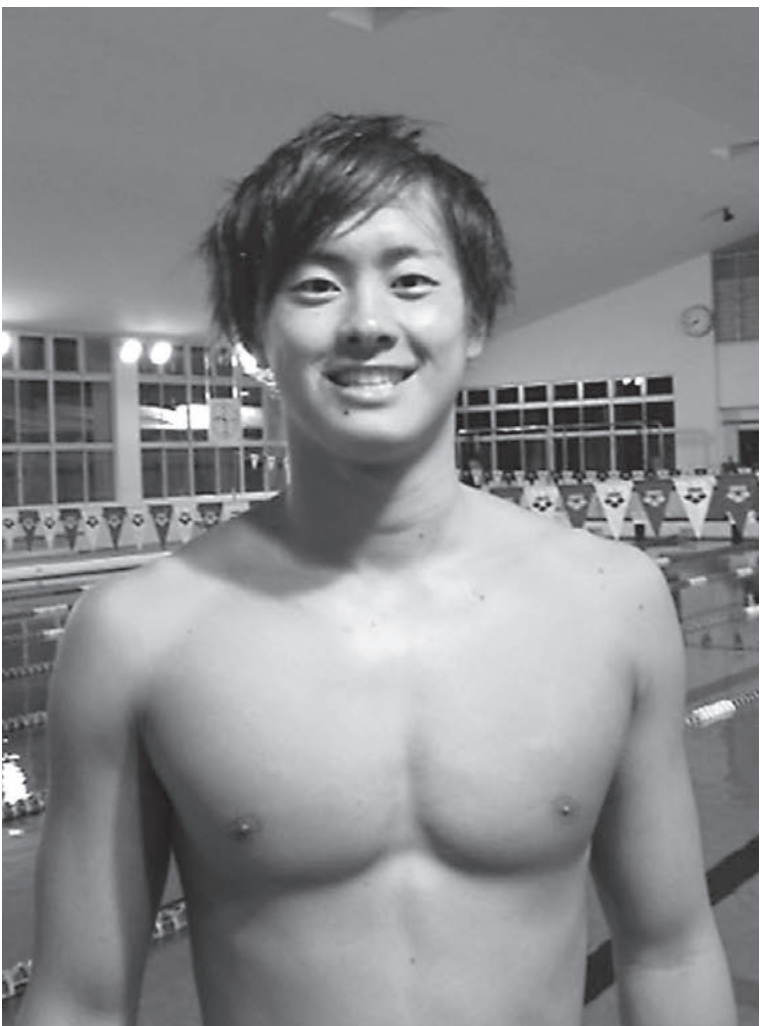
昨年は自分の試合人生の中で最も濃い一年だったという。二月に行われた日本短水路選手権では200m背泳ぎで日本新記録を更新、続く三月の冬季公認記録会では男子200mリレーメドレーで日本短水路新記録を達成した。このように本人も自分の成長を実感する結果を残していたが、最も重要と考えていた四月の代表選考会ではベストタイムを更新するも目標タイムには及ばず、2種目とも五位という結果に終わった。「この結果がとても悔しくて、からやり直そうと思いついて、夏場は色々なところへ武者修行に行き、他大学での練習

やインターナショナルの合宿に参加した」と話す。その成果もあり九月の国体では100m背泳ぎで前大会よりもタイムを縮め初出場にして二位を取った。その後、上記のワールドカップシリーズに臨んだ。日本記録更新と全大会で200m背泳ぎ金メダルを目標に掲げていたが、初の長期遠征やオフ明けがたり、始めは本来の力を発揮できなかった。しかし、試合を通して調子を上げ最終戦では金メダルを獲得することができ収穫のある試合だったという。「その後も練習を続け、今非常に良い状態にある。その意味

でも昨年は新しい刺激を受け自分の中でも色々考えながら成長できた年だった」と振り返る。

「オリンピックを目指すにはまだまだ。現状には満足していない」という。「今後の目標はやはりリオデジャネイロ五輪だが、まずは今年四月の世界選手権で代表を獲得すること。日本の背泳ぎは入江選手や萩野選手だけではなく、調子を上げていくように、追いやる五輪に向けている。持ち味のバサロキックを生かした力強い泳ぎとその先の栄光に期待したい。」

(猪本あかり)



ライト競技

松浦選手

昨年12月13、14日、つくばカピオアリーナにて日本ライト競技選手権が行われた。そこで女子総合優勝を果たした松浦佑希選手(体育4年、埼玉・聖望学園高)にお話を伺った。

大きな2本の鉄輪が平行に繋がれた体操器具の「ライト」が選手の重心の動きに合わせて回転する。ライトの回転に合わせて選手は優雅な動きとアクロバティックな動きが魅力の競技だ。

大学に入るまでは体操競技をしており、ライトには大学受験の頃、体操のイベントに

出向いた際に偶然出会った。ライトは思っていた感覚とは違ったが、体操競技と似ていて初めて楽しかったという。ライト競技を始めたのは大学からにも関わらず体操競技の経験もあり、すぐに才能が開花し、大きな大会に出るようになった。1年の冬に日本が選手権の中心の動きに合わせて回転する。ライトの回転に合わせて選手は優雅な動きとアクロバティックな動きが魅力の競技だ。

大学に入るまでは体操競技をしており、ライトには大学受験の頃、体操のイベントに



(篠原美奈)



蹴球部 2 部降格・・・

創部初の屈辱を胸に来季の奮起を期待



第 88 回関東大学サッカーリーグ。筑波大学史上初の 2 部降格。創部以来何人もの「リリーガー」を輩出し続けてきた名門のこんな結末を、誰が予想できただろうか。大学サッカーの歴史が動いた瞬間だった。

前半戦、第 10 節まで 0 勝 2 分け 8 敗とまさかの出遅れ。内容は良くても、あと一歩で勝利を逃してしまう試合が続いた。「負けた試合でも、根本からやり直さなくてはという内容の試合はなくて、それが逆に仇となった面はあるかもしれない」と小井土正亮新監督は話す。筑波らしく自分たちが主導権を握る戦いのできるのに、なぜか勝利をつかめない。後半戦もそんな試合が続く。徐々に選手たちにかかるプレッシャーは増していったのだらう。一度噛み合わない歯車は元に戻すのは予想以上に難しかった。

最終節は中央大との直接対決。筑波は引き分け以上なら残留、負けの方が即降格というまさに生き残りをかけて戦った。結果は、1 対 1 で迎えた後半ロスタイムに失点し逆転負け。悪夢としか言いようのない残酷な結末だった。「最後の最後にそういう状況を作ってしまったことが問題」という通り、2014 シーズンの筑波大を象徴するような試合になってしまった。

降格の理由はひとつ。言えは「勝負弱さ」だろう。「最後に足を出せるか、身を投げる出せるか、ゴールに直結するところのちょっとした差が振り返ると大きかった」という。しかし後悔ばかりでは前に進めない。苦しかったこのシーズン、降格という高すぎる授業料を払って得た教訓を、何としても来シーズンにつなげていかねばならない。小井土監督は「新体制になつて準備段階からの甘さがあつたのかもしれない。スポーツ界のシブシブな競争原理を上手く働かせることができなかったな、という反省がある。来シーズンは評価基準をきつちり示して、チーム内で競争できる環境を整えたい」と話す。苦しいシーズンを終えて、今は前を向いてやっている。

来シーズン、2 部リーグ優勝は絶対に達成しなくてはならない最低目標だ。その上で、「総理大臣杯、さらにその先のインカレと、二度日本一になる権利がある。本気で日本一を取りにいく。そのために、日本一、日本一のチームにならなくてはならない。そういう覚悟をもつてやってくる」と熱く語る。

来シーズンは 2 部に戦いの舞台を移すが、2 部の試合は筑波大の第 2 グラウンドでも行われる。一年で 1 部に戻るため、「名門」の名を守るため、一人でも多くの支えが必要だ。「筑波らしく、自分たちの内側にプライドを持つこと。そして、見ていて人に感動してもらえるようなサッカーをすること。それらを目標として日々練習している。見て損をさせるような試合は絶対しない」と、監督は約束してくれていた。今だからこそ観られる筑波大のサッカーがある。ぜひ蹴球部の試合に足を運んで応援して欲しい。

(藤原真梨子)

オリエンテーリング 筑波大学大会開催！

開催は 2 年ぶり

今年度より愛好会から部に昇格、秋の全国大会で 3 年ぶりに入賞者を出すなど勢いのあるオリエンテーリング部。今回はそのオリエンテーリング部が 2 年ぶりに開催した筑波大学大会取材した。大会の舞台となったのは栃木県矢板市。もともと多くオリエンテーリングの大会が開かれる地での開催会場には地元小学校の体育館が使用されたが、350 名を超える事前申込者に加え、当日には地元の方向けの体験会も同時に開催されたため、会場は満員の賑わいを見せた。また、会場にはスクリーンが設置され、Twitter で特定のハッシュタグをつけてつぶやくと表示されるようなしきりも設置され、斬新な試みとして場を盛り上げた。

当日の矢板市は穏やかな天気に恵まれるなど好条件の中で競技が行われ、大きな問題が発生することもなく、久しぶりの開催であったものの大会は成功に終わった。また、表彰式には地元ゆゆるキャラのともなり君が登場し、入賞者と写真撮影を行うなど、場を盛り上げた。こうした地元との連携は、その土地を利用して行う競技だけに不可欠であり、そういう面からもこの大会は成功したと言える。

しかし、大会開催に至るまでは、決して平坦な道のりではなかったという。部員の中に山に上った大会の運営経験を持つ者はおらず、過去のマニュアルを漁るところから始めたという。さらに、実際に使用する山を決定するまでも簡単に進んだわけではなく、さまざまな事情から複数回変更をすることもあつた。また、今回は今までの使用されたことのある山ではなく、新規で山を開発することになったため、それに伴ったアクシデントもあった。特に大きかったのが地図作成の遅れである。「実際に地図調査を委託する企業との連携がうまくいかず、地図の作成も遅れ、なかなかコース作成も行えなかった」とコース作成者の村瀬貴紀(地球 3 年、岐阜・岐阜北高校は語った。多くの苦労はあったというが、それでも最終的には多くの参加者の方に楽しんでいただけたのではないだろうか。部の開催をするなど、新大会の開催を、久しぶりのオリエンテーリング部。競技面でも大会運営面でも更なる飛躍に期待したい。(島根崇志)

結果一覽

【男子バスケットボール】

(第 66 回全日本)

大学バスケットボール選手権大会

1 回戦 ○筑波大 62-53 ●関西学院大

2 回戦 ○筑波大 87-64 ●関東学院大

3 回戦 ○筑波大 94-67 ●国士館大

準決勝戦 ○筑波大 67-65 ●東文化大

決勝戦 ○筑波大 67-57 ●東海大

最終結果 優勝

【女子バスケットボール】

(第 66 回全日本)

大学バスケットボール選手権大会

1 回戦 ○筑波大 73-51 ●中央大

2 回戦 ○筑波大 76-70 ●立命館大

3 回戦 ○筑波大 70-75 ●白鷲大

順位決定戦 ○筑波大 62-100 ●大阪商科大

○筑波大 73-52 ●順天堂大

最終順位 7 位

【フットボール】

(第 51 回全国大学ラグビー)

フットボール選手権大会

セカンドステージ

第 1 戦 ○筑波大 44-22 ●東文化大

第 2 戦 ○筑波大 60-12 ●関西学院大

第 3 戦 ○筑波大 43-7 ●明治大

ファイナルステージ

準決勝 ○筑波大 17-16 ●東海大

決勝 ○筑波大 7-50 ●帝京大

最終結果 準優勝

【剣道】

(第 62 回全日本剣道選手権大会)

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大

優勝戦 ○筑波大 7-50 ●帝京大



ラグビー 大学選手権 準々決勝



©2014-2015 University of Rugby Football

王者の壁、厚く 決勝 vs 帝京大 7-50

執念の逆転劇



©2014-2015 University of Rugby Football



©2014-2015 University of Rugby Football

準決勝 vs 東海大 17-16

第7回 リレーコラム

リレーコラム第七回担当の猪本です。今回は年が明けて第一号の新聞となりました。遅れながらも、皆様新年あけましておめでとうございます。早いもので、自分が新聞製作に成りかわるようになってから八か月が経とうとしています。入学当初は自分が新聞製作に携わることになるとは思ってもいませんでした。正直な話、私は特に詳しいスポーツもなかったため自分に記事が書けるとは思わなかったのです。しかし、実際に編集部に入り、蹴球部をはじめ様々な競技を観戦し、また大きな舞台で活躍されている選手の方々に直接お話を伺うことが出来る恵まれた環境で活動することができ、活動を重ねることに新聞製作への意欲が湧いていきました。スポーツに対する関心も以前よりずっと強いものになりました。今ではあまり関心を持っていなかったスポーツにも興味を持ち、テレビでも様々

ノースサイドを告げる笛が1月の調子の寒さに響き渡り、第51回全国大学ラグビーフットボール選手権大会が幕を閉じた。50-17という圧倒的な大差で5連覇中の帝京大に屈した筑波ラグビー部だが、準優勝という確かな結果を残して選手権を終えた。

国立競技場の解体に伴って、史上初めて味の素スタジアムでの決勝が行われることが決まっていた今大会、筑波大はセカンドステージを全勝で危なげなく通過し、準決勝では3-16の劣勢を試合終了直前の13分間で逆転する劇的な試合で東海大を下し、決勝へと駒を進めた。この結果を受けて、決勝戦の応援バスターが企画され、学内外の多くのファンが参加した。スタジアムに向かうバス内では、参加者を楽しませる様々な企画が用意されていた。ラグビー部のPVが流され、ビンゴ大会、ラグビーのルール説明などが行われるうちに、バスは試合会場に到着し、参加者は配られたシャツや旗を持って味の素に乗り込んだ。決勝戦の相手は、帝京大。

多くの日本代表選手を擁し、大会史上最多の5連覇中の絶対王者だ。筑波大は挑戦者として、6連覇を阻止すべく挑んだ。

午後2時30分、筑波大のキックオフで試合が始まった。相手側にはボールが蹴り出され、選手たちは相手陣内になだれ込み、次々と激しいタックルをぶつけていった。しかし、開始7分。帝京大は筑波ボールのスクラムのミスを見逃さず、素早くトライに成功。筑波大はミスという痛恨の形で先制を許してしまい、続くゴールキックも決められ0-7となった。早い時間帯に迫りつきたい筑波大は、11分に遠い距離でペナルティーゴールキックを獲得したが、山下選手(体育4年、長崎・長崎北高)の放ったキックはゴールを逸れ、さらに、準決勝まで怪我で戦線を離れたいた筑波大の主将・松下真七郎選手(体育専門4年、福岡・福岡高)が負傷交代を余儀なくされてしまう。流れを掴まれた筑波大は、前半のうちにトライとキックをさらに2回ずつ決められ、前半は0-21で折り返した。

筑波大にとっては悔しさの残る敗戦となってしまう。だが、選手権の最後まで戦い抜けたことは誇りという結果である。次の大会となる日本選手権ではこの悔しさをバネにして、いい結果が出ることを期待したい。

(高橋優太)

編集後記

年が明けて「〇五年」となり、明けておめでとうございませう。

みなさんお正月はどのように過ごされたでしょうか。実家に帰ってゆっくりした方もいれば、筑波で年を越した方もいらっしゃると思います。

年明けは箱根駅伝や高校サッカークリケットなど、私たちがほとんど同じ年代の方の活躍がたくさん見られました。プロ野球の大谷選手や藤波選手など、すでにプロの世界で切磋琢磨している人もいます。やはりあんなに力強い活躍を聞く、刺激にもなりますし自分も頑張らなければ、と強く思います。自ら厳しい世界に挑戦していくスポーツ選手たちを見習って、私たちも自分の目標に向かって精進していきましょう。寒さにならずに運動することもちろん大事ですね。冬だからといってと布団やこたつにこもっているのはいけません。時には自分の体に鞭を打ちながら、冬を乗り越えていきましょう。

遅くなりましたが、今年も筑波スポーツ新聞をよろしくお願ひ致します。

(鈴木優輔)

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/若木祥太
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/鈴木優輔(編集長)

お詫言
前号159号にて使用した男子バスケットボール部の写真が、大会当時のものではなく、それより前の古いものでした。お詫言申し上げます。大変申し訳ありませんでした。